

# フォーラムニュース Vol.46 2023 1/10

発行：フォーラム・子どもたちの未来のために実行委員会

<http://www.f-kodomotachinomirai.com/>

文責：大竹永介



皆様あけましておめでとうございます。2023年、どんな新年をお迎えでしょうか。ウクライナの戦争、安倍元総理の銃撃、と大きな事件の続いた昨年でしたが、問題は何一つ解決されないままという気がします。それでもやはり年も改まれば「今年こそ」と思うもの。フォーラム実行委員の野上暁さんからそんな「今年こそ」の思いを寄せていただきました。（編集部）

## 《新春随想》

### 父の記憶

野上暁

今年の8月には、なんと満80歳を迎えます。1943年8月末に東京の蔵前で生まれ、生後三か月で父が出征し、44年12月には祖母の実家の信州の雪国に疎開して、物心がついたころには父親は不在でした。「父ちゃんは何処に行っている？」と周りの大人たちに聞かれると「ヒコーキノリ」と、たどたどしく答えて年寄りたちの涙を誘ったと聞かされました。戦争末期で特攻隊が美化されていて、幼心にもそれに憧れていたんですね。メディアが発達していなかった時代でも、幼児が世情に影響されていたくらいですから、今日のようにテレビなどで流される膨大な情報の子どもたちに対する影響力は計り知れません。それだけに子どもの本の持つ社会的な役割を痛感させられます。

父は満州から沖縄に渡ったところまで消息はつかめていたものの、それ以降



は音信不通で、周囲の大人たちははっきり戦死したものだと思っていたのでしょうか。1946年の1月末、降りしきる雪の中を頭から真っ白になった父親が玄関から入ってきた時の記憶はうっすらと覚えています。沖縄戦の直前に台湾に転戦し、それで命拾いしたのです。父から戦争の話聞いたことは殆どありませんでしたが、生まれてからずっと女の人たちだけに囲まれて育ってきたので、

戦地帰りの父親が怖くてなかなかなじめませんでした。

8月に戦後78年目を迎える現在、政府は敵基地攻撃能力を持つために軍備増強にまっしぐらですが、自分の幼児期を思い出しながら、近隣諸国を仮想敵国にして戦争の準備をするような政権を何とかひっくり返さない限り、安心して死ねません。老体に鞭打って、軍事大国を目指して戦争につき進もうとする政権に抗い続けて行きたいと思います。（のがみあきら：評論家・フォーラム実行委員）

~~~~~

★以下は実行委員メンバーからの一言メッセージです。まずはこの1月から新しく実行委員になられた乙部雅志さんからです。

●乙部雅志 2019年トランプ政権下のアメリカで“The Sad Little Fact”という絵本が出版されました。「偉そうな人たちが事実を隠して嘘を作り出して世の中が乱れる、しかし事実を探す人たちが現れ世の中が元に戻っていく」という内容です。素晴らしいとは思いましたが日本で刊行する決断ができませんでした。一方、自民党政権下の日本では、モリカケ桜、伊藤詩織さん、ウイシュマさんのことなどで「嘘」が蔓延していました。日本でもこの絵本を「出さなくてはならないのではないか」と思い始め、そして赤木さんの裁判の「認諾」を見るに至り「のではないか」が私の頭の中で削除されました。事実、真実を求める方に翻訳をお願いしたいと思い、尊敬するジャーナリストの一人である



金平茂紀さんに打診し「これは出さないとならない絵本です」とご快諾いただきました。その直後にロシアのウクライナ侵攻が始まりプロパガンダ＝「嘘」が叫ばれました。安倍元首相銃撃以降には隠されていた事実も表に出るようになってきました。そのタイミング11月に『じじつはじじつ、ほんとうのことだよ』というタイトルで出版され、金平さんには「もっと早く出すべきだった」と思っていただけのような内容の絵本となりました。難しいと思える内容も絵本を通じて子どもたちに、大人たちに伝えることができる、のではと感じています。今後は日本の作家さんともこのような絵本も作れるように、と思っているところなのです。

（おとべまさし：イマジンエーション・プラス社長 フォーラム新実行委員）

★ではこれからは50音順でメッセージをどうぞ。

●赤石忍 「この国の政府が人民の幸福の為に存在した事は有史以来一度もない。明治においては列強に劣らない強国になるため、戦後においてはより強者だったアメリカの制度に順応するため、より強い者に従うために作られた政府

がより弱者である人民の為に働く事を自ら理解することはない」。これは「安倍元首相銃撃事件」の山上容疑者のSNS投稿文です。

彼の行動の是非はともかく、この言葉の深層に考えを巡らせていきたいと思っています。（あかいししのぶ：元編集者 フォーラム実行委員）

●**大竹永介** 今年こそ少し長めの国内旅行をしたい。今年こそ月に一度は寄席に行きたい。今年こそ友人たちとの会合をふやしたい。そして、今年こそ民主主義も平和主義も何もかもめっちゃくちゃにした政治に歯止めをかけたい。そのためにはもっともっと勉強しなくては・・・！

（おおたけえいすけ：元編集者 フォーラム実行委員）

●**加藤純子** 新しい年になりました。今年も皆さまよろしくお願いたします。新年の抱負なるものを立てたことがなく行き当たりばつりに生きております。でも今その生きることも大変な事態に日本は直面しております。Jアラートもまともに住民に知らせる能力もなくただの脅しで終わっているトンマな国が「反撃能力保有」？冗談ではありません。これまで日本を守ってきた平和憲法をすり抜けて。恐ろしい話を次から次へと政権は「大したこと」もなさそうな顔で話します。2023年はいったいどんな年になるのでしょうか。

（かとうじゅんこ：作家 フォーラム実行委員）

●**澤田精一** 東日本大震災が起きたのは2011年、兎年でした。今年、2023年もまた兎年です。兎はピョンと跳ねます。何事も起きないことを祈ります。ところで政府は「敵基地攻撃」を謳っていますが、それがちゃんとできるには、たくさんの軍事衛星、24時間監視できる組織が必要です。これには莫大な費用が発生します。それが可能だとしても、敵も同様にたくさんの軍事衛星、24時間監視できる組織があるはず。そこにミサイルを撃ち込んでも成功するのかしら。それがやれると思っているところに、言い知れぬ幼児性を感じてしまいます。（さわだせいいち：元編集者 フォーラム実行委員）

●**濱野京子** 「今年こそ」の決意を、という大竹編集長からの指示に頭を抱えました。この昏迷の時代、その心境にはあまりに遠く、深い絶望感を覚える新年となりました。なので以下は決意でなく願望。今年こそ、民主主義を取り戻す。今年こそ、ウクライナをはじめ世界が平和に向かう。今年こそ、どの国も差別と貧困がなくなることに真剣に取り組む。今年こそ、多くの人々が気候危機に向き合う。今年こそ、もう少し本が売れる（これはつぶやき）。以下「今年こそ」多数につき省略。

決意の今年こそを一つ——己に語る場があるのならば、語るべきことを臆することなく誠実に言葉にしていきたいと思えます。

(はまのきょうこ：作家 フォーラム実行委員)



●藤田のぼる 昨年はいろんなことがありましたが、中でも前年に亡くなられた那須正幹さんの思いに触れることの多い一年でした。

那須さんは著作権を児童文学者協会に遺贈されましたが、税金などの関係でこれが確定したのが2月、7月の一周忌の前に偲ぶ会を開くことができました。そして那須さんの人と仕事を振り返る

『遊びは勉強 友だちは先生～「ズッコケ三人組」の作家・那須正幹大研究』(ポプラ社)を11月末に出すことができました。この中で、那須さんの「沈黙したとたん、戦争はたちまち、きみのまわりに忍びってくるにちがいない」という子どもたちへのメッセージがあります。多くの人に届くように、もっともつと声を上げていかなければと、思わずにはられません。

(ふじたのぼる：評論家 フォーラム実行委員)

●2023年最初のフォーラムニュースをお届けいたします。国内外の情勢を考えると、どうにもあまり華やいだ気分にはなれない、というところですが、それでも念頭にふさわしく今年への思いを実行委員に語っていただきました。皆さんの「今年こそ」はどんなものでしょうか●昨年読んだ本のなかに「世界は五反田から始まった」(星野博美/ゲンロン刊)というものがあります。私は3歳から高校の途中までを五反田周辺で過ごしていて、最初はきわめて個人的な興味関心から読み始めたのですが(実際昔の五反田駅周辺の写真など懐かしくてたまりませんでした)読後、純粋に一つのノンフィクション作品としてとても大変優れたものと感心しました●著者の祖父の代から始まるいわば「家族史」なのですが、戦争を潜り抜けた庶民の記録としても貴重なものであり、なにより「被害」と「加害」のからみあった「戦争」の実相が見事に描き出されていると思いました●ノンフィクションというと世の中を騒がせた大きな事件とか、著名な人間を追求する、というようなものを考えがちですが、こうした自分の足元を丁寧に掘り続けることによって「大きな問題」にもつながっていくという「私ノンフィクション」というスタイルも十分有効なのだとあらためて考えさせられました。昨年の大佛次郎賞の受賞作でもあります●暮れの「徹子の部屋」に出演したタモリの「来年は新しい戦前の時代になるだろう」という発言が話題を呼んでいます。タモリらしい鋭い言葉、と私も思います。さて、その「戦前」に私たちは何ができるのでしょうか。今年もよろしくご支援のほどお願い申し上げます。(0)